

# 歳



苫小牧市医師会  
苫小牧澄川病院

横田 孝 一

本年の年男とのことで、北海道医報の原稿依頼をいただいた。前回の年男というものをほぼ無自覚に通過した年月を経て、もうそんな歳になったのかという現実にはやや戸惑いを覚えながら、そんな歳になっても格段面白い話を書ける訳でもなく、披露できるような趣味特技もないので、近況報告という形で書かせていただきます。

歳と言えば、最近どうも自分の年齢がややふやになる時がある。若いころは40歳の壁を越すことをやや難儀に感じていた。どんな40代になるのだろうという焦りにも似たものがあったのだろうが、実際超えるとほとんど諦めの境地で、逆に歳というものに無頓着になった。成人後は通常「今(満)何歳だ」「今年(誕生日後に)何歳になります」、そして古い方からは「数えていくつだね」という場面により幾種類かの年齢があるように思う。自分の場合、誕生日が12月と年末なので「今何歳で、今年何歳になる」が長い。この年齢になると問われて意識する機会はめったになく、結果どれが満年齢なのかややふやになってしまうという訳である。実際何かの書類に1つ多い歳を書き込んでしまい、後で訂正されて来た時には少々冷や汗をかいた。歳を一つもつけたと喜ぶ前に、若年性やら長谷川式やら物騒な単語が脳裏に浮かんできて焦った。

肝心の近況だが、この数年は苫小牧市内の西の外れにある、介護療養病床が8割の中規模病院にて、体調(腰)への配慮から外来診療中心に勤務させていただいている。各種採血臨床検査やエコーCT上下部内視鏡など、基本的な検査は一通りあるので、どれもたいして読めるわけではないが、これはという所見がそろえば一般病棟に即入院させてもらったり、また専門的な精査加療が必要であれば、市内外の基幹病院・専門病院にご紹介申し上げ、患者さんともども大変助かっている。各方面おおむね好意的に受け入れていただいているようで、有り難いと感じる毎日である。しかし時に、急性期患者を基幹病院にお願いする際は、やや強引に依頼する形となってしまう至極恐縮する。

医師になって2年目に関東のある派遣病院に勤務したが、当時同県々北にはそこよりほかに大きな基幹病院と言えるものがなく、大抵周辺の患者たちはそこで死ねれば本望、といった風な医療地域性だった。そしてほぼ着任早々に、やや難儀する症例を担当した。22歳の女性なのだが、薬物抵抗性の頻脈性

不整脈で、同じ医局の先輩(循環器科医長)と産婦人科医長との強い勧告により、結婚予定の男性との間に妊娠した子どもを既に前年墮胎していた。その女性が懲りずに再び妊娠してしまったのだ。先輩も産婦人科医も再度の中絶を勧めた。本人は死んでもいいから産みたいと強情を張ったが、さすがにそういう訳にもいかず、そのままでは当然のごとく説得されてしまいそうな場面であった。そこで正に若さに物を言わせてとばかりに先輩に「何とかありませんか」と連日依頼した。23年も前の話で、現在のようインターネットで最新治療を模索する等ということはできず(ネットのねの字どころか携帯電話さえまともに無かった)、何の根拠もなくただ若い情熱だけで先輩にすがり続けた。来た早々に迷惑なネーベンだと思つたろう。しかしさすがにそこは先輩で、現在はハイテクながらもいぶん一般的になってきたものの、当時はようよう日本に輸入され始めたばかりのカテーテルアブレーションならどうかと教示してくれた。先駆的な医師のいる某隣県に患者を連れて行き、その先生の考案で胎児のいる腹部を鉛の板で遮蔽しながら施行し、ついに不整脈は根治に至った。そして患者さんが数ヵ月後「おかげさまで」と抱いて来た子どもを見た時には言葉を失うほど感無量であった。…医者ならば誰しも同様の経験はあると思う。逆に陰の極に対する様な症例や身内の話もある。

つまるところ、現在外来で前にしている患者さんたちは、ほぼ青壮年から老年中心で、時に百を数える方もいるが、恥ずかしながら私にとっては上述の彼女と一緒にいるのだ。だから後も先も考えない。結果ややもすると、基幹病院の激務でお疲れの先生方に、少々強引にご紹介申し上げてしまうという話なのだが、ぜひ笑ってご理解ご容赦いただきたく思う(市内外の基幹専門病院、医師会員の諸先生方、いつも快く受けて下さり誠にありがとうございます。この場を借りて感謝の言葉とさせていただきます)。

先の事になると、これまで幾つと知れぬ病院にお世話になりつつ流れてきた。有り難い境遇にはあるが、また遠からず、どこも知れぬ新たな地に流れていくのだろうと思う。財務厚労一体の改革により医療界はかつてない変革期にある。この激動の時代にあり、あまり成長しない自分ではあるが、今年は多少なりとも良い歳の取り方をしたいものだと思う。